

# 萌えいずる世界、紡がれる宇宙

小澤 実

——書評・金沢百枝『ロマネスクの宇宙——ジローナの《天地創造の刺繡布》を読む』

地中海の陽光が煌くバルセロナから程近い都市ジローナ。その大聖堂宝物館に、一枚の刺繡布の断片が保管されている。修復を経た現物は、縦幅三・六五メートル、横幅四・一五メートル。円環の中心に、右手を掲げた創造主の座すこの刺繡布は、ロマネスク・ヨーロッパで生み出された佳品である。同じ都市に保管されながら、鮮烈な極彩色のコントラストが見るものの中に穿つ十世紀の『ジローナ・ベアトウス』とは対照的に、今にも萌えいずるとする草々のように、優しく、柔らかく、それでいて活力に溢れるジローナの《天地創造の刺繡布》。本書は、この一つの刺繡布に十二年間を捧げた著者の、すべてである。

\*

十世紀末から十二世紀半ばに差し掛かるまでのヨーロッパを、ときとしてロマネスク時代と呼ぶ。その後のヨーロッパ

なにもかもが、芽吹こうとする時代。《天地創造の刺繡布》は、十一世紀から十二世紀の転換期という、まさにこのロマネスク時代に織り上げられた。しかしながら、そのモニユメンタルな性格にもかかわらず、この刺繡布は、決して汗牛充棟の研究書に恵まれていたわけではない。理由は単純で、現物以外の手がかりがほとんど残っていないからである。誰が、どこで、どうやって、何のために、この刺繡布を紡ぎあげたのか。コンテキストを欠くこの作品の詳細を知りたければ、一見表情豊かなが、肝心のところで口をつぐんだ刺繡布そのものと対話しなければならぬ。そうと決めた著者の分析手法に、奇を衒うところはない。刺繡布というものを、ひとつのテクストに見立て、そこに描き出された図像の意味を探る、きわめて正統的な図像学的作法である。

刺繡布の現存部は、大きく三つの部分に分かれる。まずは、創造主を中心に配し、創世記の諸場面で囲んだ〈円環〉、風配

【新刊】

## ミュージアムと記憶

知識の集積／展示の構造学  
S・クレイン編著／伊藤監訳  
個の記憶／存在と集合的な記憶／  
歴史が相互に作用しあうサイトと  
して、時代と場所とジャンルを自  
在に横断／越境し、近未来のポス  
ト・ミュージアムを解き明かす。

定価 6300 円

## 中世における 女性の視覚化

視ること、スペクタクル、そして視覚の構造  
田中久美子

〈眼差し／視覚〉を縦糸に／女性  
身体／様式〉を緯糸に、ロマネス  
クからゴシック、バロックから近  
現代へ、女性身体のスペクタクル  
化を追い、男-サディズム／女-  
マゾヒズム的表象を解体する！

定価 5250 円

## ラファエッロと ジュリオ・ロマーノ

「署名の間」から「ブシケの間」へ  
上村清雄

盛期ルネサンスからマニエリスム  
へ、ラファエッロの晴朗なるフレ  
スコ画からジュリオの官能に満ち  
た生の表現へ、クビドとブシケ  
の愛の物語をテーマしたイメージ  
の連鎖の中に美の表象化を探る。

定価 5040 円

## オンリー・コネクト……

イタリア・ルネサンスにおける美術と観者  
J・シヤマン／足達他

定価 7560 円

【著作集全7巻完結】

## アビ・ヴァールブルク著作集

全7巻・別巻1

伊藤博明＋加藤哲弘 監訳

## ありな書房

〒113 東京都文京区本郷1-5-15  
TEL 03 (3815) 4604

図と月暦図からなる〈円環の外〉、そして作品の脚に置かれた  
〈聖十字架伝〉である。これら三つの構成要素は、それぞれ意  
味を持つ幾つかの図像を内包し、あたかも曼荼羅のような多層  
の入れ子構造をかたちづくる。それらはもちろん一枚の刺繡布  
として一つの図像プログラムにしたがって配置されているが、  
著者はいったん細部にまで降りたち、各構成要素の図像学的意  
味を引き上げる。論旨は明快、図版もふんだんに収録されてい  
るから、図像学の専門用語を知らずとも、読み通すことができ  
る。

本書の中心は第一章から第五章までの図像学的分析である。  
第一章「宇宙図としての刺繡布 時間の円環と地の果ての風」  
では〈円環の外〉を、続く第二章「礼讃図としての刺繡布 万  
物による創造主礼讃」、第三章「礼讃図の二匹の海獣 ケート  
スの系譜とドラゴンの誕生」、第四章「新しい礼讃図の生成

「天地創造型マイエスタス」と瞬間的創造」では〈円環〉を、  
そして第五章「約束された楽園 「聖十字架発見譚」の役割と  
意義」では、〈聖十字架伝〉を読み解く。個別図像を検討し、  
その全体プログラムを復元した結果、《天地創造の刺繡布》が、  
それ以前以後の時代とは異なるロマネスクの宇宙像をその背景  
に凝縮させた、創造主を礼讃する新しいタイプの図像表現であ  
ることを主張する。

第六章「《天地創造の刺繡布》をめぐる諸問題」においては、  
これまでの図像学的解釈からいったん離れ、刺繡布のコンテク  
ストに目を向ける。著者は刺繡布をとりかこむ歴史状況を考慮  
し、作成地はカタルーニャ、作成時期は十一世紀から十二世紀  
の転換期、図像プログラムの発案者は高位聖職者、注文主は女  
性、刺繡の刺し手にはイングラント関係者を想定する。そして  
断片である刺繡布は、本来四・五メートル四方の正方形であ



《天地創造の刺繍布》 11世紀末—12世紀初め ジローナ大聖堂宝物館  
金沢百枝『ロマネスクの宇宙』（東京大学出版会、2008年）より

り、それがジローナ大聖堂の西扉口ナルテクス部分の回廊ラ・ガレリアに、聖週間と復活祭という春の限定された期間に展示されていた可能性を示唆する。

読み通して興味深いのは、著者の視線が、時間的にも空間的にも、キリスト教カタルーニャに内在する要素の外部に向いているところである。風配図は古代ローマの遺産、月暦図は北方ヨーロッパ起源、図像構図はローマ型、刺繍はイングランド人の手法というように。このように著者は、刺繍布の「国際性」を強調する。モニユメンタルな作品であればあるほど、作成地の特殊性を強調する傾向があるなか、著者の見解は卓見といつてよい。もちろん地域の特性がなくわけではないが、国境概念が希薄である時代ゆえに、ひと、もの、情報、技術はたやすく越境する。そして、いったん広がりを見せた議論は、ロマネスクの宇宙の表象としての刺繍布という結論に、収斂する。全体から部分へ、そして部分から全体へ。本書の構成そのものが、ひとつの詩学である。

\*

文字テキストと図像テキストを往来する著者の論

理は明快である。晦渋な表現や強引な理屈は、本書にはない。仮説の論拠はすべて提示され、議論のすべてが読者に開かれている。こうであれば批判も同意もすつきりとゆく。開かれた論理は、その行間に想像力が入り込む余地を残す。それゆえに、図像学も図像テキストの布置状況も知らぬ一般史家であるわたしにも、著者への扉をたたくことが許されるだろうか。

最初に、イスラームとの接触の可能性を問いたい。ひとつは、布の問題である。刺繍布が羊毛を下地としていることは確かだが、その羊毛がどのような種類かはつきりとしていない。じつはこの刺繍布が作成された時代、スペインの社会経済システムは、大きな変動を迎えていた。つまり、イスラーム経済史家モリス・ロンバルが指摘するように、中東原産のメリノ種羊が、北アフリカを通じてイベリア半島に持ち込まれたからである。ひよつとすると刺繍布は、メリノ種という中東起源の新しい

羊毛で織られたものではなかったか。

もうひとつは刺繍布を彩る、この優しい色調の問題である。おそらく褪色があるため、本書で色調に深く触れることはないが、この朱茶色と萌え黄色と薄緑を組み合わせた類似の色調は、メトロポリタン美術館に収蔵される八世紀ウマイヤ朝の刺繍布や、十一世紀レオンで作成された「聖ペラギウスの聖遺物箱」のイスラーム製内張りにも見られる。個々の図像伝統やロマネスク期に特有の柔らかい線による書割は、たしかにキリスト教美術の伝統の枠内で説明のつくものだろう。しかしながら、染料、媒染剤、あるいは染め方は、それが作成された特定の文化的空間の嗜好や社会経済的条件が決定する。若やいだ雰囲気をかもし出す色調——そしてその組み合わせは、何らかの象徴体系にしたがっている——は、ヨーロッパ半島というよりも地中海世界で継承されてきた可能性はないだろうか。

# トーマス・マン物語

クラウス・ハーブレヒト  
岡田浩平 訳  
各巻●7800円＋税

現代ドイツ文学の最高峰トーマス・マン。膨大な資料を縦横に駆使して、あくまでその人物像に迫ろうとする伝記物語。

【全三巻】  
Ⅰ巻 少年時代からノーベル文学賞まで  
Ⅱ巻 亡命時代のトーマス・マン  
Ⅲ巻 晩年のトーマス・マン

# ピカソ《アヴィニヨンの娘たち》 アヴァンギャルドの挑発



クラウス・ヘルディング  
井面信行 訳  
●2200円＋税

一九七〇年に描かれ、現代美術の出発点となったピカソの裸婦群像。造形作品のみが暴き出しうる言語化しえない世界の表出をめざしたその挑戦！

最新号  
ことばと社会  
11号特集：移民と言語①  
●2200円＋税

三元社

東京都文京区本郷1-28-36 1F  
電話 03-3814-1867 FAX03-3814-0979

フランク王国の辺境としてのカタルーニャは、確かにイスラーム化はしなかったかもしれない。だからといって、イスラームの技術や知識を拒絶していたわけではない。アル・アングラス（イベリア半島のイスラム圏）の隣接地として、ごく自然に、イスラームの文化要素も混入していたことは、多くの論者の確認するところである。著者は、その画像伝統や写本生産からローマや北方ヨーロッパの要素を刺繍布に見、グレゴリウス改革期でもあった同時代の政治構造にも目配せをすることで、「国際性」の可能性を提示するが、馥郁たるイスラーム文化の混交せる地中海世界もまた、刺繍布の紡ぎ手たちを刺激する、一つの要素ではなかっただろうか。

さて、次の問いに移ろう。それはロマネスク概念の再考である。本書のタイトルから明らかなように、著者は美術史の通例にしたがってロマネスクという時代概念を前提としている。ロマネスクを文字通りにとれば、「ローマ風の」という意味であり、エミル・マールやアンリ・フォションが取り上げた中西部フランスの諸要素が、ロマネスク世界の典型となる。とはいえ、一種の統一的様式で説明されうる十三世紀以降のゴシック美術と異なり、ロマネスク美術は、ひとつの基準に当てはまらない例外が、あまりに多い。

建築にせよ、絵画にせよ、刺繍布にせよ、文書にせよ、ものを生み出すのは人間集団である。ひとびとは、生まれた時代特有の環境の中で、在りしを継承し、在るを彫琢し、在れかしを

残す。たとえば池上俊一は『ロマネスク世界論』（名古屋大学出版会、一九九九年）のなかで、ロマネスク時代を、その前後の時代とは異なる一種共通する心のあり方が充盈する時代と捉えた。かりにこの理解にのつとるならば、ロマネスク時代のものもまた、そのようなロマネスク人の感性と美意識で満ち満ちている。その後のヨーロッパの諸要素がたちをとりうとしていたロマネスク時代は、堅牢なるシステムが完成されたゴシック時代と異なり、カタの少ない過渡期であったことは間違いない。それゆえに、見る角度によって、全く異なるロマネスクが映し出される。地域性や多様性をゆるす、おおらかな時代……。

著者の研究は、『天地創造の刺繍布』の円環部に描かれた二匹の想像上の動物が何かを問うところからはじまった。一見するとマンガのようなキャラクターで、「真面目な」研究者であれば、あえて見落としかねない要素である。しかしながら著者の目は、そこに異教時代の記憶、受容、文化変容という、まことに大きな問題が隠れていたことを見抜いた。ロマネスクの魅力は、ただ漫然と対象を見ているだけでは気づくことのない、こういったキリスト教精神の蔭にかくれた要素にもある。刺繍布だけではない。ロマネスク美術の教科書ではほとんど論じられることのない、イギリスはキルベックの教会の持送り彫刻や、ノルウェーはヘッゲ教会の「へんな顔」もまた、ロマネスクの一部である。ただの装飾と切つ捨て捨てる向きもあるかもしれないが、それらは現実にロマネスク・ヨーロッパで呼吸をし

# 藤原書店

森崎和江コレクション 精神史の旅 (全5巻)

■ 産土 うぶすな 5期

精神の歩みを辿るように5期に分けて構成する画期的コレクション、発刊！【内容見本呈】 3780円

## 戦後思潮

知識人たちの肖像

粕谷一希 平成の読者に贈る、「新古典」への最良のブックガイド。解説対談・御厨貴 3360円

## 「内発的発展」とは何か

新しい学問に向けて

川勝平太・鶴見和子 詩学(ポエティカ)と科学(サイエンス)の統合をめざす渾身の対話。 2310円

## 三生三世

中国・台湾・アメリカに生きて

轟草琴 世界の文学者が集う「作家村」を創出した著者の、一箇の小説の如き自伝。島田順子訳 4830円

別冊『環』⑮

## 図書館・アーカイブズとは何か

人類の知の記録をいかに継承するか。粕谷一希・菊池光興・長尾真・高山正也/根本彰/大濱徹也ほか 3465円

◎偽装、安全問題の噴出する今、「食」とは。

学芸総合誌 季刊 **環** 歴史環境文明

vol. 35 2008年秋号

(特集)「食糧問題」の問題点  
榊原英資・幕内秀夫・岩澤信夫・山下一仁・鈴木圭介・山田國廣ほか

(小特集)進藤榮一・孫歌・山室信一  
(連続座談)塩川正十郎・粕谷一希・片山善博 (シンポジウム)佐藤俊  
/速水融ほか (寄稿)奥村直司/結城幸司/木村知義/鶴見俊輔ほか  
(連載)石牟礼道子ほか 3360円

月刊 **機**

B6変32頁 12月号 No.202  
E・トッド/F・アルトーグ/水島和則/松原久子/田辺徹/川村奏/阿辻哲次/堀切利高/金子秀敏/尾形明子/山崎陽子/一海知義ほか  
年間購読料2000円(送料込)◎見本誌・ブックガイド呈 \*表示価格税込

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町523  
振替 00160-4-17013 TEL.03-5272-0301  
ホームページ http://www.fujiwara-shoten.co.jp/

ているのである。建築、彫刻、絵画といった「大芸術」だけではなく、装飾品や工芸品といったもの、の世界にまで充滿する口マネスク。様式で整理できる「大芸術」の蔭に見え隠れする、様式を超越した「ささやかな」要素。《天地創造の刺繡布》というものにこだわり続けた著者であれば、ただゴシックへの過渡期については済ませられない口マネスクの世界に、「もの」を輝かしめる従来とは別の装置を持ち込んでくれるだろうか。

\* 〃

の授業案内をざっと見渡しただけでも、文学史、哲学史、美術史、言語史、科学史、法制史、政治思想史、経済史、教育史、建築史というように、「史」とつく講座は数多くある。それぞれの「史」は、独自のディシプリンを持ち、お互い無関係に独立しているかのように、研究と教育を進めている。

しかしながらそもそも歴史家とは、なにもものなのだろうか。わたしの理解によれば、歴史家(Historian)とは、何らかの証拠に基づき、在りし世界の姿をわずかなりとも明らかとすることを仕事とする。日本で一般に歴史といえば文献史学をさし、場合によってはそれ以外のディシプリンを「補助学」だとか「周辺諸学」と見下げるけれども、それはあまりに狭い見方である。歴史家であるならば、自分が明らかにしたいテーマにとって、最も適切なテキストを選択し、欲しいデータを最も効果的に引き出せるように、そのテキストに問いかね、読み解かね

ばならない。言ってしまうは、年代記も、裁判史料も、自伝も、図像も、建造物も、すべて「読む」べきテキストである。それぞれのテキストには、それぞれの癖があり、その癖に対処するのが、専門のディシプリンであり、決してその逆ではない。だとすれば、他のディシプリンから結論のみ借用するのは危険である。どのような過程を経てその結論に至ったのかを考えねば、「学際」などはない。それこそ学際の偉大なる先覚者マルク・ブロックに、鼻で嗤われてしまう。

『ロマネスクの宇宙』は、学際の生きた実践例である。著者の武器である図像学を最も効果的に機能させるため、書冊学、典札学、哲学史、一般史の襲に分け入り、それぞれの限界を見極めつつも、いま欲するデータを引き揚げる。著者は、本書の副題をあえて「ジローナの《天地創造の刺繍布》を読む」としている。刺繍布を「読む」。だから、歴史に携わるものは、専門を問わず、地域を問わず、時代を問わず、最初のページをめぐってみればよい。そして、本の最後に綴じこまれた刺繍布の縮刷をじっと見ながら、十二年間にわたる著者の思考を、追体験してみればよい。

ジローナの《天地創造の刺繍布》は、ロマネスク時代という、ヨーロッパが萌えいずる世界で紡がれた、人間精神が凝縮する宇宙である。著者は、過去の学説の注釈にとどまることなく、なかなか語ろうとせぬただ一枚の刺繍布そのものに目線を合わせ、その心を——すべてではないけれども——開かせた。

文章の隙間から诗情すら匂いたつ『ロマネスクの宇宙』は、作品論であると同時に、歴史学とは何かを原点に立ち戻って思惟させる、歴史学再考の試みでもある。

(おざわ・みのもる 西洋中世史学)

金沢百枝

## ロマネスクの宇宙

ジローナの《天地創造の刺繍布》を読む

A5判・四四八頁・一二六〇〇円

高山博・池上俊一編

## 西洋中世学入門

A5判・三八四頁・三九九〇円

ヨーロッパ中世史研究会編

## 西洋中世史料集

A5判・四四八頁・三三六〇円

甚野尚志・堀越宏一編

## 中世ヨーロッパを生きる

四六判・三三〇頁・二九四〇円

東京大学出版会（表示は税込価格）